
ティンカーベル - D - 4 番外編 -

和 貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティンカーベル - D 4 番外編 -

【Nコード】

N 4 8 1 2 C

【作者名】

和 貴

【あらすじ】

辺境の惑星に派遣された空軍パイロットのエステル少尉が捕らえた少女は、その惑星に古から「神」として伝承されていた有翅族の娘だった。自己の欲に溺れた彼の相棒はエステルと少女を裏切り貶める……デリートシリーズ4に続く、序章番外編ですが、短編としても読み切れます。こちらはサブキャラのアーヴィンの少年時代ですが、彼が主人公ではありません。現在4は未投稿と言う情けない状態です。

第1話 遭遇

「此方S、2、最終防衛空域を通過。現在、異常無し」

エステル少尉はその日の作戦終了を伝えて安堵した。

戦況の情報収集を完了した後、主翼に飛行機雲を曳きながら、二機の偵察戦闘機は低空飛行に移行して空軍基地へと帰還する途中であつた。

眼下に一面に広がる美しい緑の絨緞が、その下部に続く陰鬱とした奥深いジャングルを包み隠している。

低空飛行の為、今にも機体後部にある二枚のフィン型ファンネル（放熱板）が、異常に成長して伸びた緑に引っ掛りそうだ。

「おい、下、二時の方向、距離三百！」

エステル少尉と一緒に行動していた相棒のマーベリック少尉が、付近の異常を察知した。

一瞬で緊張が奔り、二時の方向をレーダーで確認する。

反応は無い。

「異常は無……？」

言い掛けて言葉を飲み込んだ。慌てて乱暴に酸素マスクの遮光シールドを跳ね上げる。

「何だ？ あれは……」

エステルは蒼い眼を細めて訝った。

二メートル大の眩い光源が自分達と並走飛行していた。時折、鋭角に曲がって急降下したかと思うと、ジャングルの中に消えては再び現われたり、ジグザグに移動したりしている。

（生物？ 戦闘機のS、2と同じ……いや、それ以上の速度で……？）

レーダーに機影等確認出来ない。

IFFも沈黙している。それだけ未確認物体の対象が小さいのだ。

「此方S、1、本機と並走飛行する未確認物体を捕捉」

マーベリックが通信回線を開いた。

驚いた事に、本部からはその未確認物体を捕獲せよとの指示が下る。

「了解これより捕獲する」

マーベリックの指示で、エステルは電磁波の捕縛網を射出した。

エステルには、光が一瞬その動きを鈍らせて躊躇したかの様に思えた。

「やった！」

マーベリックが散々苦勞しても捕獲出来なかった光源を、エステルは一発で決めた。

捕縛網は光源を絡め摂ってジャングルの奥底へと消えて行く。

「やるじゃないか！」

マーベリックが手放して喜んだ。

「？……は……あ」

しかし、エステルは捕獲出来た成功の喜びよりも猜疑心の方が勝っていた。余りにも簡単過ぎたからだ。

容易に捕獲出来たのは自分の実力ではなく、故意に光源が自分に協力してくれた様に思えて納得出来なかった。

鬱蒼と生い茂る木々の間をエア・バイクが駆け抜ける。

二人はそれぞれに分かれてエア・バイクで落ちた光源を搜索する事にしたのだ。

この辺りのジャングルは磁気を帯びた鉱石が多く岩盤に含まれているのか、計器類が狂いつ放しだった。専ら肉眼での搜索に頼る他無い。

「チイ、チイ、ゲガガ……」

すぐ傍の草叢で獣の鳴き声がした。

何かが暴れている。

エステルはエア・バイクの高度を下げて辺りを慎重に見渡した。

自分達は光源を捜しているのだ。簡単に見付かる筈だった。

（鳥か獣か…… そういや、古代地球生物に翼竜なんて生き物もあったよなあ）

此処はその地球から遥か何百光年も隔たった辺境の惑星だ。原始の古代生物が生息していても不思議ではない。

頼むから肉食類は勘弁してくれと暢気に思った。

歩道など皆無の頼り無い茂みを掻き分け、一歩、一歩足場を確かめながら慎重に歩を進めて行く。

手元で握り締められている麻痺銃の銃把がじつとりと汗ばんで来る――

身の丈以上の大きな羊齒類しだを掻き分けた。

「な……」

エステルは呆然として立ち竦み、息を呑んで言葉を失った。

自分が捕獲した網の中には、小柄な美しい少女が捕らえられていた。

艶やかな長い黒髪に、透ける程色素のない白い肌。パツチリとした碧の瞳に、興奮してほんのりと赤みが差した頬。溶ける様な甘やかな唇は朝摘みの苺の様だった。

すらりとした細い両の手足や、膨らみかけた胸のライン、未成熟さが残っている細いウエスト――

（俺は夢でも見ているのか……？）

エステルは自分の眼を疑った。

この忌々しいジャングルの何処をどう捜せばこんな美少女が捕獲出来るのだろうか？

しかし、地球外惑星だとはいえ、此処は紛れもなく危険なジャングルなのだ。豹や虎にそっくりの肉食獣もいれば、アナコンダやカイマンといった爬虫類もご丁寧に揃っている。

何よりもエステルが驚いたのは、この厳しい環境の中でさえ、彼女が一糸纏わぬ姿でいる事と、その彼女の白い背中に、身長ほどの

蜻蛉の様な薄い翅が在った事だった。

それまで必死で逃れようとしていた少女——は網の中からエステル
の姿を見上げると、途端に大人しくなった。かと言って、彼に怯
えている様子でも無い。

「ひよつとして……これがあの「メーヴ」？ 有翅族の？」

少女は黙って小首を傾げると、「チイ」と鳴いた。

「エステル！ 見付かったか？」

マーベリックの声が近付いて来る。エステルは慌てて自分のパイ
ロットスーツの下に着ていた濃紺のタンクトップを脱いだ。

兵士にしては少々貧相な彼の赤銅色の上半身が露になる。

エステルの銀色の髪と赤銅色の肌、そして蒼い瞳は奴隷難民のグ
レネイチャである証だった。肌が浅黒い人間はよく見掛けるが、エ
ステルの持つ銀髪に蒼（い）瞳はそう滅多にはいない。

少女は驚いた様に瞳を大きく見開き、エステルをまじまじと見上
げる。

エステルは自分の着ていたタンクトップをその網の中に居る少女
に差し出した。

「我慢してこれを着て。さ、早く」

「？」

少女は、差し出されたエステルの大きな濃紺のタンクトップを手
にしたが、用途が判らないのか不思議そうに広げて眺めている。彼
女には着衣の慣習が無い様だ。

「……困ったな」

裸であってもそれが本人の慣習なのかも知れないのに、此方の勝
手な都合で着替えさせようと意識している方がよっぽど卑猥に思え
た。だが、此処にはもうじきマーベリックが来る。

エステルは彼の眼に少女の有りの儘ままの姿は見せたくないと思った。

「エステル？ 居るんだろう？」

マーベリックの声がどんどん近付く。

「ごめんな」

エステルはそう言っ
て彼女の手からタンクトップを奪うと、無理矢理頭からそれを着せた。少女が身を固くして「パイ！」と鳴いて拒絶したが、愚図々しては居られない。

ぶかぶかのタンクトップは、胸元まで深く開いた濃紺のワンピースの
様に見えなくも無かった。

「此処だ！ マーベリック」

「何だよ。傍に居たのなら居るって言え……よ……？」

マーベリックもエステル同様に、捕獲されたのが少女だと知って
呆然と立ち竦んだ。

第2話 少女

「何でお前が連れて行くんだよ？ 発見したのは俺だぞ？」

マーベリックはコクピットで口を尖らせた。

「発見したのなら俺だつて同じだ」

エステルはコクピット後部にあるサブ・シートに、その少女はちょこんと座っていた。

彼女は眼下に流れるジャングルの景色を飽きもせずに見詰めている。その姿はとても捕獲されている様には見えなかった。

不平不満のマーベリックだったが、少女は明らかに自分よりもエステルを選んでいた。

彼が少女に近付いた途端、少女はあからさまに怯え、その手はエステルのパイロットスーツの端をしっかりと握り締めて放さなかったからだ。

「マーベリックが厳つい顔して睨むからだよ」

そう冗談っぽく言って中性的な物腰のエステルが笑った。

「別に、睨んだりしてないさ」

ムツとして言い返す。

（顔やガタイは生まれつきだからどうしようも無いじゃないか……畜生、エステルは女みたいな顔立ちだから女に安心されて享けるんだよ……）

世の中、不平等だとマーベリックはボヤいた。

「おいで、傷を診てやるよ」

エステルは少女に食事と傷の治療薬を持って来てやった。

檻に入れられた少女は小さくなって隅に蹲うすくまっていた。少女の首には既に軍の研究員から逃亡防止の首輪が留められている。見た目にはシンプルな銀のチョーカーだが、その機能は遠隔操作のスタンガ

ンのような物だ。

エステルは少女に留められた首輪を見て可哀想だと思った。

捕獲の命令が下っていたが、自分が態わざと取り逃がしていれば、この少女は檻に入れられる事も無かっただろうに……そう思うと少女に対して申し訳なかった。

視線を少女の脚に遣った。少女の右脰みぎうでじほには捕獲後に受けたと思われる大きな裂傷があった。エステルは彼女を発見した直後に気付いていたが、その時は治療薬など所持していなかったのだ。

（傷の手当ぐらいして遣れば良いのに……）

一度少女は研究員達に渡っている。彼女が負傷しているかぐらい判りそうなものだ。

少女はエステルを見上げると、のそりと緩慢に反応した。右足を庇かばう様に引き摺りながらエステルの居る檻の扉まで寄って来る。

「お腹が空いているだろう？ さ、お食べ」

エステルは自分達と同様の食事が盛り付けてあるトレーを少女に差し出した。

「チイ？」

少女はエステルに問い掛ける視線を送るだけで、手を出そうとはしなかった。

「そんなに不味いとは思わないが……軍のレーションじゃ口に合わないのか？」

（駄目だな。言葉がまるつきり通じない……）

それでもエステルの言った言葉には反応を示す。

言語が通じなくても何とかアイ・コンタクトでコミュニケーションが取れそうだった。

すぐ隣の建物から、女の甘く切ない声が聞こえて来た。兵士達の慰問に来た女達の艶声だった。

少女はその声に興味を持ち、じっと耳を傾ける。

「こ、こら。聴かなくていい」

エステルは少女の傷に治療薬を塗って遣りながら頬を赤らめた。
少女の右足は片膝を立てた状態で、エステルが着せたタンクトップが少女の腰までたくし上げられていた。視線の角度さえ変えれば意図（も簡単に秘所が覗ける。興味が無いと言えば嘘（になるが、生憎幼い彼女の身体で興奮する気にはなれなかった。

「アーヴ！ 聴いてくれ！ 凄い奴を俺達が捕まえた！」

戦禍で重傷を負った少年のアーヴィンの許を訪ねて、軍の医療キヤンプへ来たエステルは息を弾ませながらも嬉しそだった。

アーヴィンもエステルと同じく銀髪に赤銅色の肌。そして蒼い瞳を持つ「グレネイチャ」と呼ばれる奴隷難民の種族だった。

十歳になる小柄で痩せた子供はやたらと眼光の鋭い少年だった。

先日（の軍に因る誤爆の被害者の一人で、エステルが偶然にも被災地から助け出したのだ。

同じグレネイチャ同士……とは言っても、品行方正なエステルとは違って、見た目がスラムあがりの様なアーヴィンではあったが、不思議と二人のは良好なものだった。

エステルがその話を切り出すまでは――

「いいか？ 驚くなよ？ あのな……」

「だから、何だってんだよ？」

勿体もったいな付けを付けるエステルにアーヴィンは医療ベッドの上で焦れた。
十歳以上も年上のエステルに向かつてのタメグチである。此処まで来ると、度胸があるのだから単なる馬鹿なのだか……

「有翹人のメーヴを捕まえたんだ。本当に綺麗な翹があるんだぞ？ 凄いだろう？ お前が動ける様になつたら見せて遣るぞ？」

御伽噺だとか幻だとか言われていた、翹を持った人間――エステルはその種族を捕獲したと伝えた。

一瞬でアーヴィンの顔色が曇った。ただでさえ悪い目付きが一層凄みを増してエステルを睨にらみ付ける。

「可愛い女の子だ。多分、お前と同じ年頃じゃないのかな？」

「ハン！ どうせまた何処かの村でも襲って捕虜にした女じゃねーのか？」

アーヴィンは全くエステルを信じていない。

「あのS、2と並走して飛行していたんだ」

「あー？ 夢でも見てんじゃねーのか？ フカシてんじゃねーっての」

アーヴィンの礼を失した言葉にも、エステルはにこりと余裕で微笑んだ。

「……？」

態と怒らせようとしていたアーヴィンが、彼の態度に一瞬怯む。

エステルはアーヴィンのそんな表情を見逃さない。アーヴィンも見掛け倒しではないエステルの隙の無さには正直驚いていた。

「女の子……って言うってたけど、もうヤツチャツたのか？」

急にアーヴィンの声調が下がり、暗くなる。

「え？」

エステルはアーヴィンの言葉の意味が理解出来なくて首を傾げた。

「その娘とヤツたのかって聴いているんだよ」

苛々しながら食って掛かった。

「ヤツた……って？ 何言ってる？」

子供の口からは到底聴けそうに無い言葉に、エステルは困惑した。
「惚けるなよ！ 俺はいろんな奴等を知っているさ。兵士の全部がそうってワケじゃないけど、アンタ達の一部の奴等には、争いとは関係の無い村を襲って略奪を繰り返しているのも居る。こんな辺境の惑星での内乱でさえ「連邦軍」っていうご大層な大儀名文を掲げて首を突っ込み掻き回す。拳句に今度は有翹人の捕獲だあ？ 有翹族はこの星での「神」として神聖に扱われている生き物なんだ」

「か……「神」？ だって？」

「ああ、その神聖な「神」を面白半分にアンタは地上へ引き摺り落とした！」

「……」

「頼むから、早くその娘を逃がして遣つてくれよ」

「……しかし……」

エステルは言葉を失った。命令は絶対だ。今更どうやって捕獲した少女を逃がす事が出来るだろうか？

「頼むよ……」「神」が汚けがされないうちに逃がしてやってよ」

縋り付く様な眼で身動き一つ取れないアーヴィンは、エステルをベッドから見上げた。

「汚される……って」

エステルはアーヴィンの言葉に一抹の不安を抱いて空軍基地に戻った。

第3話 裏切り

エステルは基地に戻って来るなり、真っ先に少女の檻へと急いだ。アーヴィンが意味深に言った言葉の断片が頭の中で混濁する。少女の身を案じて、不安が彼の脚を急がせる様に掻き立てた。

幸い、兵士達には慰問に来た女達が居る。幾ら女の肌に飢えているとはいえ、まさか子供にまで興味を示す者は居ないだろうとも思った。

エステルの手が檻の部屋のセキュリティ・パネルに叩き付けられる。

「あ……」

ドアを開け放った途端、一種独特な青臭い異臭が立ち込め、エステルを立ち竦めさせた。

少女の身体は力無く檻の中央に、文字通り仰向けに投げ出されていた。透き通るほどに白かった少女の肌は青白く、その小さな身体には無数の擦り傷や痣が刻まれ、「男」の体液が塗り込められていた。一体、何人に弄ばれていたのだろうか？ 美しかった翅は無惨にも千切られ、その欠片が静かに少女を取り巻く様にして落ちていく。

（遅かった……）

目の前が真っ暗になった。

『神聖な神』――

アーヴィンの言葉が割れ鐘の様に何度も彼を打ちのめす。

エステルは少女の手首を取って脈を探った。

弱々しいが、微かに脈を打っている。

「！……まだ生きている」

けれど、少女は既に呼吸をしてはいない。原因は少女が喉に詰めた多量の体液だった。

エステルは急いで少女の口の奥に指を差し入れ、詰まった体液を

吐き出させる。

十分に吐き出させた筈なのに、少女はまだ息を吹き返さない。それどころか、少女の体温が急激に低下している。

エステルは少女の頸椎^{けいつい}を片手で持ち上げ、顎を上げさせる様にして気道を確保した。鼻を摘むと直接口から息を送る。独特な体液の残り香に閉口するが、それを気にして構っている場合では無い。心臓部^{じふし}に拳を宛がい、規則正しく圧迫する。動かされる度に少女の身体から白濁した物が流れ出る――

「戻れ！ 戻って来い！」

何度も何度も祈る様な気持ちで根気良く繰り返した。

やがて青白かった少女の肌にはんのりと紅が差して来る。

「グワツ！」

少女は綺麗な容貌とは反対に、家鴨^{アヒル}の様な醜い声を上げて咳き込み、呼吸を取り戻した。

「助かった……」

エステルはほっと安堵の溜め息を漏らす。

「あれ？ もう見付かったのか」
聴き慣れた相棒の暢気な声に、エステルは怒りを覚えて振り返った。

「マーベリック……お前……」

声が震えて戦慄^{せんりつ}いた。

「仕方無いだろ？ このお嬢ちゃんがコツチを誘ったんだから。俺達はそれに応えてやっただけだ。それにあのシャツ、何処かで見た事があったよなーって思ってたら、エステル、お前のじゃないのかよ？ 抜け駆けしたのか？」

マーベリックが腕組みをしたままで軽く顎を杓^{しやく}つて見せた。その先には、エステルが少女に着せたタンクトップが無惨に引き千切られて落ちている。

確かにマーベリックの言う通り、着衣の習慣が無い有翅族^{メイヴ}は、兵

士達の情欲を掻き立てるのには十分だった。ましてやそれが幼いとはいえ美しい少女となれば猶の事だ。

「クソッ！」

エステルはアーヴィンの様に口汚くマーベリックを罵った。

「こうなる前に、始めから捕獲なんかしなければ……」

「もう遅せえよ。ソイツは大事な金蔓になりそうだからな。絶対に逃がさない」

マーベリックの醒めた眼がエステルを見据えた。

「マーベリック！」

「^{ついで}序にエステル、お前もだ」

妖しい目付きでマーベリックはエステルの身体に視線を這わせた。
「な？ 序……だって……？」

マーベリックの言葉の意味がエステルには全く理解出来なかった。

唐突にドアが開き、十数人もの兵士達が入って来た。

入り口に立っているマーベリックに黙って金を払い、ギラギラした厭らしい目付きと卑猥な笑みを湛えて少女とエステルを視姦する

マーベリックは渡された金をまるで斡旋仲介者よろしく当然の様に受け取って行く。

エステルは背筋に悪寒を感じた。それは一種の殺気だったのかも知れない。

「マーベリック！」

エステルは叫んだ。

「兵士の中には慰問の女ぐらいじゃ満足出来ないって奴も一杯いるんだ。中にはお前みたいな奴にそるってのも居るんだよ」

「じよ、冗談は止めてくれ！」

自分でも信じられないほどの怒りにエステルは激高した。

「前々から俺はこいつ等から頼まれていたんだ。」「エステルを調達してくれ」ってな？」

頭をハンマーで殴られた様なショックだった。

「ち、調達……って？ 何の事だ？ 俺を調達する？」

マーベリックの言葉が中々理解出来なかった。それだけエステル
の思考回路は混乱状態にあった。

「恨むんならお前のその女みたいな綺麗な面^{ツラ}を恨めよ。多分、殺されたりはしないだろうからさ」

「キイッ！」

すぐ後ろで獣の様な鋭い鳴き声がした。

少女が先に何人もの兵士に押さえつけられ、組み敷かれる。

エステルはその光景を目の当たりにして怯んだ。

「貴様！ こんな事をし……」

「軍法会議にでも掛けて見るか？ お前が証人として立つ事が出来ればの話だが？」

エステルの言葉を遮る様に、マーベリックは先手を打った。

「……」

（コイツ、俺が動けない様に計算して……）

「お前は体調不良で当面の任務から外された事になっている」

「何だと？」

「何、ほんのチョツと眼を閉じて居てくれれば案外楽しめるかも知れないぜ？」

マーベリックはそう言つてニヤリと笑うと檻の部屋から出て行った。

非情にも外から施錠される。

「マーベリック！」

エステルは絶叫した。

「殺セツ！ 貴様等に触れられるくらいなら死んだ方がマシだ！」
必死に抵抗したが、素の線が細いエステルに彼等の腕力が敵うものではなかった。

あつという間に羽交い絞めにされ、舌を噛み切らせない為に猿轡さるくわを噛かまれた。

青ざめたエステルの表情が恐怖に慄おのく――

室内から兵士達の気配が消えた。

彼等の暴行は数日続き、その日も一晚中続いた。

「お……い……生きているか？」

震えながら上体を起こし、歩伏前進で少女に近寄った。
とても歩行出来る状態ではなかった。

「……」

微かに反応があった。

抵抗すれば少女を殺すと何度も威された。

エステルの兵士として、男としてのプライドは無惨にも微塵に打ち砕かれてしまった。

それどころか、いつの間にか肉欲の快感を覚えてしまったもう一人の自分が居る。そんな自分が惨めで情けなかった。いつその事殺されていた方がマシだと心底思った。

少女の浅く、喘ぐ様な速い呼吸が聞える。

エステルは裡捨うちてられた人形の様な少女の姿を恐る々見上げて、自分の眼を疑った。

ほんの数日しか経っていないのに、なだらかだった身体のラインはメリハリのある豊かな曲線を描いていた。少女だったその身体がいつの間にか変貌していた。

自分でさえまともに食事を摂っていなかった。彼女に至っては、捕獲された時から一切の食事を摂ってはいない。なのに少女の身体は痩せる処か逆に「女」として数年分の成長を遂げていたのである。
「馬鹿な……」

エステルは彼女の肢体に眼を見張って驚いた。

『神聖な神』――

アーヴィンの言葉が真っ白になったエステル頭の頭の中で蘇る。

しかし、彼女の艶やかだった黒髪は煤^{すす}け、弾けそうだった甘やかな唇はひび割れ、その端には血が凝固していた。背にあった美しい翅は付け根の肩から引き裂かれ、致死量に至るほどの夥^{おびただ}しい大量の血が床にべったりと貼り付いていた。

（失血……手遅れだ……）

何もかもが終わったと感じた。

目頭が熱くなり、何かが溢れ出た。

「ごめん……ごめんよ。お前を護って遣れなかった……」

何も出来なかった自分の不甲斐無さ、無力さを痛烈に感じていた。肩が震え、床に付いたエステルの拳に滴が落ちる。

彼女の頭が僅かに動いた。

「良いの……貴方に……逢えたから」

「え？」

エステルは我に返った。

息も絶え絶えの少女が喋った。今までは獣の様な奇声しか出せなかったのに……

「お、俺を知っているのか？ お前は一体……？」

「私、シャラ……シャサラ・ナージャ……よ」

それだけ言って、彼女は僅かにエステルの方に顔を向けた。青白い表情から、彼女が重篤な状態に陥っているのが判る。

「シャラ……」

シャラの生気の無い澱んだ視線が泳ぎ、エステルを捉えた。

儚げに微笑むと静かに瞳を閉じる。

シャラの涙が彼女の頬を伝って流れた。

エステルは彼女の涙に見惚れたが、すぐに現実に取り戻される。

「シャラ？ おい、しっかりしろ！ シャラ？」

やっと息を吹き返したと思って安心した矢先だった。

「神」とされ崇められていた種族の彼女は冷たくなって息絶えた。

「うつ……」

エステルは床にひれ伏したまま声を押し殺して嗚咽する。

「マーベリック……俺はお前を許さない……」

第4話 幻影

夢の中のシャラは初めて出逢った時のままだった。

眩しい笑顔で、追い掛けるエステルを軽やかにすりりとかわす。

（どうして俺の事を知っているんだ？）

シャラは笑顔のまま答えない。

「シャラ、待って……」

エステルは自分の声で眼が覚めた。

（此処は……？）

エステルは自分の居る場所の特定をする為に、左右に視線を奔らせた。

見覚えのある煤けたドーム型の天井、自分の腕に施されている点滴のパック……

朦朧としていた意識がハッキリとして来る。

「やっと気が付いたか？」

すぐ傍で優しい声が掛けられた。

「……ダグラスさん？」

エステルは補給支援部隊の老人の名を呼んだ。

あれからエステルは意識を失い、何日も眠っていたらしい。

「お前を見付けた時は、もう駄目かと思ったぞ？」

その言葉に、エステルは現実に取り戻され、弾けた様に跳ね起きた。

「マーベリック！ アイツを……」

（殺してやる！）

感情が一気に昂り、呼吸が乱れた。

「待て！」

ダグラスはエステルの初めて見る険しい表情に驚きながら、彼の肩を捕まえた。

「落着け。何があつたのかワシは知らん。が、マーベリックなら部隊にはもう居らんぞ？」

「え？」

「此処数日前から何人もの兵士が行方不明になっておつてな、マーベリックもその一人だ」

「行方……不明？」

「ああ。まるで神隠しにでも遭つた様にな。一部の者は、何かの祟りだと怯えとる」

「神隠し……」

ダグラスの言葉を聴いたエステルは我に返つた。

ベッドに寝かされていた自分は意識を失う前の姿だった。全身に奴等の体液が乾涸びてこびり付いている。

途端に猛烈な羞恥心が彼を襲い、全身が真つ赤に火照つて震えた。エステルは慌ててシーツを肩まで引き上げるが、ダグラスはそんな彼を此処まで運んで来ていたのだ。

「……まあ、時には稀にお前の様な目に遭う者も居る。災難だったと思え」

ダグラスはエステルの気持ちを察して静かに言つた。まるで彼と同じ目に遭つた者を何人も目にして来た様な口振りだった。

「自分と一緒に居た少女は？」

「少女？ ああ、女の遺体なら先に研究員が持つて行つた」

「遺体……です……か」

声が沈んだ。

「もう少し眠るといい。忘れろ」

ダグラスの世話になつて数日が過ぎた。

十分回復したエステルは、再び任務に復帰する事が出来た。

自分がマーベリックに貶められ、辱められた事実が暴露されれば、直に除隊しようと決心していた。

けれど、何故かダグラス以外に誰もその事を知る者は居なかった。不思議に思つて上官に行方不明者のリストを見せて貰つたが、彼等全員が自分と彼女をマーベリックから買った者達だった。

「天罰でも下つたんじゃないのか？」

唯一、その事を知っているダグラスに相談したが、笑つて相手にしてくれない。尤も、ダグラス自身でさえ理由は解らなかつた。

（天罰……なんて、そんなもの……有るワケ無い）

問い掛けにまともに応じてくれなかつたダグラスがほんの少し憎らしかつた。

巨大な夕日が、2のタラップを降りるエステルの横顔を赤々と照らし上げる。

そのすぐ隣には、主を失つた、1機がぼつんと停まっていた。

「エステル！ お前に呼び出した」

メカニツクのジョイが彼を見付けて呼び止めた。

「デュラン大佐が第七格納庫に来てさ」

「大佐が？」

「お前、何かしでかしたのか？」

ジョイが怪訝そうにエステルを覗き込む。

「エステル少尉、参りました」

エステルは背筋を伸ばして大柄なデュラン大佐に敬礼をした。

「おお、君がエステル少尉かね？」

「はっ！」

穏やかなデュラン大佐の声に何のリアクションもせず、エステルは機敏に返事を返した。

「そう、堅苦しくする必要は無い。少尉を呼んだのはこの『ティンカーベル』に目通りさせる心算だったからだ」

デュラン大佐は砕けた言い方をして、気持ち身体をエステルの視界から退けた。

「『ティンカーベル』……で、ありますか？」

エステルは視線をデュラン大佐から彼の後ろで控えている物体に移動させた。

その機体は左右の三段階に広がる主翼を折り曲げ、まるで休息している白銀色の鳥の様に見えるほど完成された美しいフォルムだった。

滑らかな曲線から構成される『ティンカーベル』は各機能に最新式の装備を搭載している。特にA・I機能は類を見ない程優れており、最大七機のダミー機の遠隔操作が可能だった。

尾翼下部に魚のヒレの様な形をした広範囲レーダーを搭載している。着陸時に機体の内部に収納されたその部分が熱帯魚の『ソードテールフィッシュ』に似ている事から後に『ソードテール』との別称でも呼ばれるようになる。

エステルはじつとその機体に魅入っていた。

「気に入って貰えたかな？」

デュラン大佐の物言いが心の片隅で引つ掛った。

「一つ、お尋ねしても宜しいでしょうか？」

「何かね？」

「何故「自分」なのですか？ 自分は既にS-2のパイロットです」

「その事かね……」

エステルは黙って顎を引いた。

「これは先日完成した試作品だ。^{プロトタイプ}だが、「彼女」はどのパイロットの搭乗をも拒否した」

「彼女？」

エステルは訝しみ、眉を顰めて聴き返す。

「そうだ。そして、「彼女」は君を指名した」

デュラン大佐の澄んだグレーの瞳に、戸惑いを隠せないでいるエステルの姿が映っていた。

「じ……自分には、全く何の事だか……」

「では、こう言えば解るかね？ 「彼女」は先だって死亡した有翅^{メイ}族の娘だよ」

（シヤラ……！）

心臓がドキリと大きく脈打った。

膝がガクガクと笑い、その波動は彼の全身を震えさせる。 立っているのが精一杯だった。

「我々は遂に有翅族^{メイウ}と生体融合した『ティンカーベル』を完成させる事が出来たのだよ」

デュラン大佐は自分の言葉に軽く酔っている様だった。

その傍らで、視線を逸らし肩を怒らせて、痛い程の両の拳を握り締めているエステルの姿があった。

デュラン大佐や他のスタッフも居なくなり、機体を照らす照明の光度が落されてもエステルはずっと『ティンカーベル』の前に佇ん^{たたず}でいた。

「……シヤラ……そこに居るのか？」

エステルはそつと機首に触れてみた。

金属特有のひんやりとした冷たい感触……

（いや、シヤラはもう居ない……）

彼女を助ける処か、自分さえ救えなかった惨めな自分が、皮肉にも再び「彼女」と巡り逢えるとは思っても見なかった。

目の前が揺らめいた。

「……エステル……」

背後で聞こえたその声に、エステルははっとして顔を上げた。慌てて袖で顔を擦る。

「シヤラ……なのか？」

「お願い！ ……怖がらないで」

振り返ろうとしたエステルを、柔らかな肉声が遮った。

「怖がる？ 俺が？ そんな事はないさ。でも、本当に……お前な

のか？」

振り向いたエステルの視界に、淡い仄かな光に包まれたシャラの姿が浮かび上がった。

流れる艶やかな黒髪に、殆ど色素の無い白い肌。初めて出逢ったジャングルの奥地での少女とは全く異なった完成された女性のライン。その背には蜻蛉かげろふの様な薄い翅――

余りの美しさにエステルは一瞬息を呑んで気後れする。

「逢いたかった……」

長い睫まつげに憂いを帯びた碧い瞳は、再びエステルと逢えた喜びに涙していた。

音も無く彼女の翅が震えたかと思うと、シャラはふわりと飛翔してエステルの胸に飛び込む。

（シャラ……）

彼女を自分の両腕で抱き留め様とした瞬間、彼女の身体は光の欠片になって飛散し、消えてしまった。

「……」

受け止め損なったエステルは、その両手を握り締めて俯いた――

第5話 賭け

「最終テストだ」

管制塔で『ティンカーベル』の飛行テストを見守っていたデュラン大佐は、パイロットであるエステルに切り出した。

この一週間、非公開で行われた『ティンカーベル』のテスト飛行は、デュラン大佐をはじめその開発関係者達にとって満足出来る仕上がりだった。

―「いつでも」

メイン・モニタに映ったエステルが大きく頷く。

「そこから二つの管制塔が確認出来るか？」

―「はい」

「君から向かって右の管制塔は3、Dのダミーだ。君はそのダミーに向かって最大速力で突っ切れば良い」

―「……？」

エステルが言葉に詰まった。彼の戸惑いがモニタを通して手に取れる。

「どうした？ 簡単な事だろう？」

―「……仰っている意味が……何かの間違いではありませんか？ 自分には左の管制塔がダミーだと……」

「私を疑うのかね？」

―「い、いえ……けっして……」

「なら、こう言えば良いかね？ これは命令だ」

―「はっ、はいッ！」

エステルの返事にデュラン大佐は満足そうに頷き、通信回線を閉じる。

そして各所定の位置に就いていたスタッフを見廻した。

―「……全員、直ちに此处から回避せよ」

デュラン大佐は決断を下した。

その場に居合わせた全員がデュラン大佐に注目する。

しかし、誰も持ち場を離れようとはしない。

「どうした？ 早く退避しないと君達まで巻き込まれてしまうぞ？」
デュラン大佐は動かないスタッフを驚いた。

「大佐こそ避難して下さい。我々は、最期まで『ティンカーベル』
を見届けます」

責任者の男が静かに口を割った。

「な、何を言っておる！ アレを造らせたのは私だ。私こそ残らなければならん」

「では、我々もお供します」

「……あの機体の本来所有すべき性能が備わっているか、否か……
成功するものだと確信するには余りにも確立が低すぎる。私は無駄な犠牲は望まん」

「もとよりその心算です。ご一緒させて下さい」

彼の言葉に、その場に居合わせていたスタッフの全員が頷いた。

「シャラ、どう思う？」

エステルはA・Iのシャラに問い掛けた。

「エステルと言った事が正しいわ」

「なら、最大速度で左のダミーに……」

「それは無いわ」

「？」

「デュラン大佐は私の本来持っている能力を試そうとしているの
よ。貴方の命を賭けて」

「……狂っている……」

エステルは誰にとも無く呟いた。

（それとも何らかの確信があつての事が……？）

「狂って……そうかも知れないわね。如何します？ ダミーに向
かいますか？ それとも……」

「決まっている。これは命令だ。俺はシャラを信じるよ」

シヤラに余計な心配を掛けさせまいとして努めて明るく振舞った。
——「……エステル」

ジェット・タービンのインジケータ数値が撥ね上がり、レッドゾーンに突入する。

全身に凄まじいGが押し掛かった。

テスト飛行の為、危険警告コールを切っていたが、切っていなければずっと鳴りっぱなしだった筈だ。

エステルは十分な飛行距離を確保すると、『ティンカーベル』の機首をデュラン大佐の指示した管制塔に向けて、最大速度へと加速した——

青白い二基の噴射炎はアフター・バーナー（再燃焼推進装置）によって既に『ティンカーベル』の機体の倍以上に伸びている。

左右の景色が識別不能になり、唯一、正面ピンポイントでの目視確認が可能だったが、エステルの意識は半分朦朧として消えかかっていた。

超音速で地上に接近した『ティンカーベル』は大気中の水蒸気を収束して、機体後部に円錐形のサウンド・バリアを身に纏う。

『ティンカーベル』の外部状況をモニターで捉えた管制塔スタッフは感嘆の溜め息を漏らした。

そして今度は轟音を伴い急接近して来る『ティンカーベル』の機体にそれぞれが戦慄した。殆どの者が眼を覆い、顔を背ける。

目の前の恐怖に、堪らずに何人かが悲鳴を上げる——

——瞬く間にエステルが選択した本物の管制塔が接近する。

（管制塔に人が……！）

エステルは自分が今にも「特攻」して行く目標に、蠢く人影を
見した。

（デュラン大佐？ 皆……！ 何故此处に？）

「か、回避だ！ シヤラ緊急回避を……」

慌てて操縦桿を引こうとするが、両腕の筋肉は既にびくりとも動

かない。

目の前にあるモニタが目にも留まらぬ速さで数値を算出している。

「や……止める！ シアラ！」

（間に合わないッ！）

エステルは堅く眼を閉じて、次の瞬間に襲われるであろう衝撃に覚悟を決めた。

―「……テスト完了。これより通常モードに移行します」

シアラの通信が堅く眼を閉じていたエステルの耳にも届いた。

「……？」

（生きている……？）

コンソールにあるサブ・モニタが、後方に遠去って離れて行く無傷の管制塔を映し出していた。

（馬鹿な？）

エステルは小刻みに震える右手をやつとの思いで操縦桿から引き剥がすと、その掌をじっと見詰めた。

衝撃に襲われるのは、ほんの一瞬の筈だった。

あの速度で、しかも管制塔との距離は近接していた。喩えどんなに腕の良いパイロットでも理論的にも物理的にも回避は不可能だった筈だ。

（これがシアラの能力？ 一体、どんな手段で切り抜けたんだ……？）

―「エステル、大丈夫ですか？」

シアラが気遣って声を掛けた。

「あ……？ ああ……」

エステルは抑揚の無い生返事を返すので精一杯だった。

第6話 少年

エステルはパイロットとしての腕と『ティンカーベル』の機体で数多くの戦果を挙げて行つた。彼に対する上官の評価も上々で、少尉から中尉へと昇格していた。

彼の技量も然る事ながら、『ティンカーベル』（シャラ）の性能が他の機種よりも数段勝つていたのは言うまでも無い。

そして、他の機種の追隨を許さない圧倒的な『ティンカーベル』の能力値の高さに嫉妬した者の中には、「エステルは、『ティンカーベル』のお陰で成り上がった中尉だ」と陰口を叩く輩も居た。

「二重スパイ？ 本当なのですか？ ……自分は、その……」

エステルはデュラン大佐の言葉を疑つた。

「残念ながら、これは信頼出来る確かな情報だ」

デュラン大佐はエステルの気持ちを慮^{おもんばか}つてか、同情する様な眼で彼を見下ろした。

「……」

（生きていた……！）

エステルはカッと頭に血が昇るのを覚えた。

慌ててデュラン大佐に気付かれない様に視線を落して俯^{うつむ}く。

「マーベリック・ルノー。彼は此処数年の我々の作戦内容及び極秘資料を漏洩^{もつてい}させていた張本人だ。先日、彼の姿がマハールの街で確認された」

デュラン大佐は手元のスイッチを押した。

エステルの眼の前に、等身大に映つたマーベリックの姿が3-Dで再生される。

マーベリックはこざつぱりとしたスーツ姿で隠しカメラに収められていた。ぱつと見は何処かの企業幹部といった風格だ。

軍から逃亡すれば銃殺刑が待っているにも関わらず、彼は何自由無く生活している様だった。明らかに強力な何者かの庇護^{ひしご}が、彼の背後に見え隠れしているのが窺える。

（シヤラの仇！　そして……）

やつと癒え掛けていた心の傷が再び抉^{えぐ}られる様に疼^{うず}いた。

しかし、彼の目の前に居るデュラン大佐には、エステル^{エスター}の身の上に何が起こったのかを知る由も無い。

「今更君に事後報告も無いのだがな、君も行方不明になった相棒の事が気懸かりだろうと思って、お節介にも首を突っ込ませて貰ったのだ」

「どついう意味ですか？」

「地球連邦軍から、本部隊への撤収命令が下った。我々は一週間後に全軍を引き揚げる。君にはその殿^{しんがり}を頼みたい」

「……了解しました」

（小者^{こもの}は今更処分には値^{あた}しないう事か……）

噂でエステルが特殊戦闘機隊に配属され、数多くの功績を挙げたのだと聞いていたアーヴィンは、久し振りに自分を訪ねて来た彼の顔を胡散臭そうに覗き込んだ。

「どうしたのさ？　俺が寝込んでいる間に「中尉」だなんて……随分と立派になっただんな？　で？　今日は俺に武勇伝でも聴かせてくれるのか？」

「相変わらずの厭味だな……」

エステルはニコリともしないで自分と同じグレネイチャの少年を見詰めた。

「違うのか？　もう、俺に笑い掛けたりしなくなっただんな？　特殊戦闘機のパイロットってそんなに偉いんだ」

「俺は何も、お前から聞きたくも無い皮肉を聞きに来たのじゃない

ぞ？」

エステルは珍しくアーヴィンの言葉に反応した。

「なら、何なのさ？」

「アーヴ、お前は……」

言い掛けて言葉に詰まった。エステルはアーヴィンに問い質し^{ただ}そうになった言葉をぐつと飲み下す。

「？ 何だよ」

アーヴィンはそんなエステルを怪訝な様子で窺^{メーヴ}った。

「何でも無い……そうだ、覚えているか？ お前に有^{メーヴ}翅族の女の子を紹介する約束だったよな？ 彼女はシャサラ・ナージャ。俺はシヤラって呼んでいる」

医療キャンプから二キロ程離れたジャングルの空き地に、その銀色の機体がひっそりと息を詰めるようにして着陸していた。

戦闘機を間近で目にしても、アーヴィンは単純に喜ぶ普通の子供の反応はしなかった。

「お前にとってはこの機体も憎むべき存在……なのかな？」

エステルは小声で呟いて複雑な表情を浮かべながら、コクピットに滑り込むアーヴィンを見上げた。

^{グレネイチヤ}

軍の誤爆に巻き込まれた奴隷難民のアーヴィンが、重症を負って医療キャンプに運ばれたのはもう四ヶ月も前の事だ。

経過だけを聞けば、誰もがアーヴィンに同情するだろう。

けれど、それが被害を被って重症を負った少年が引き起こした事態だとは誰も当時は疑ってはいなかった。

諜報部からの報告を受けた時でも、エステルはそれをすんなりとは受け容れられなかった。彼は未だにアーヴィンと報告のどちらを疑うべきなのかを迷っていたのだ。

「？ 何ぶつぶつ言ってるんだよ？ ねえ、『シャラ』は何処？」

「……お前の目の前にあるA・Iの事だよ……」

「A・I？ 女の子じゃなかったのか？」

アーヴィンの何気なく言った言葉がエステルの感情を逆撫でする。
「彼女は……死んだ」

喉の奥から声を絞り出した。

エステルは、アーヴィンの視線から逃れる様に顔を伏せる。

「……アンタが殺したのか？」

驚くほど冷淡な言葉が投げ付けられた。

「違う！」

「いいや、アンタが殺したんだ。そう言えよ。そうなんだろう？」

アーヴィンは子供とは思えないほどの醒めた眼でエステルを見下ろしていた。

澄んだ蒼い瞳が、言い訳すら出来ないエステルを責め立てる。

「違う……俺は……」

（そうだ！ 俺が彼女を殺したんだよッ！）

言い淀んだエステルの中で、もう一人のエステルが叫んでいた。

アーヴィンの正体を突き止めようと彼の許を訪ねて来たエステル
だったが、反対に追詰められてしまった自分が居た。

「……子供の癖に……お前に一体何が判るんだ？」

「逆ギレしてんじゃねーよ」

「こ……の……」

言い返す言葉が見付からなかった。

（やはりアーヴは何処かの工作員なのか……？）

争いに巻き込まれ、戦争を憎み、軍を憎んでいる少年——もしかすると、アーヴィンはそんな少年を演じているのではないか……？
疑い始めると限が無かった。冷静な判断を欠いてしまったエステルは、自分の背後でそつと拳銃の銃把を握り締める——

アーヴィンはそんなエステルの殺気を敏感に感じ取っていた。

左右に視線を奔らせ、脱出経路を模索して見るが、『ティンカー

ベル』が着陸している付近の広場には身を隠す物さえ見当たらない。必要以上にエステルを刺激してしまった事を後悔した。

「いよいよ覚悟を決めた時、『ティンカーベル』のモニタが動いた。ね、ねえ、メールが来たよ？」

アーヴィンはエステルにそう言っ、目の前のコンソールにあるモニタに視線を戻した。

「！」

自分の眼を疑った。

それは『ティンカーベル（シャラ）』からのアーヴィンに宛てたメッセージだった。

（……このまま文字が読めない振りをしろ……だって？）

「何のメールだ？」

エステルがタラップを昇って来る。『シャラ』であるA・Iはアーヴィンに宛てたメッセージを素早く削除した。代わって本隊からエステルに宛てたメールが開く。

「ああ？　ン、でも俺、文字読めねえモン」

平然と言ってのけた。

「……？」

エステルの動作が一瞬停まる。

アーヴィンの返事に毒気を抜かれた気がした。

エステルは銃把から手を解き、アーヴィンの居るコクピットを覗き込む。

それは同僚の訃報だった。

「何、ヘコんでんの？」

アーヴィンの視線に、エステルは冷静さを取り戻して穏やかに微笑んだ。

「良い奴から皆先にお迎えが来るんだよ。俺みたいなのがいっつもこうしているんだ。だからと言って、アーヴ、お前は俺よりも先には逝くなよ？」

「何？　それ」

「そんなのは年功序列って言うんだ」

そう言って、エステルは悪戯っぽく笑った。

「はああ？ 意味不。ワケわかんねえー」

アーヴィンはタメグチで口を尖らせた。

意味の無い勝手なエステルの理屈に付き合わされたフリをして。

（嘘が下手だな……）

それぞれがほぼ同時に相手に対して思った。

鬱蒼としたジャングルのその向うに、真っ赤な夕日がゆっくりと沈んで行く。

エステルとアーヴィンは草叢に座り込み、紅く染まりながらも黙って夕日を眺めていた。

やがて、エステルが腰を上げた。

「シヤラに会わせると言った約束は果した。これでお別れだ」

「これで……って？」

アーヴィンはエステルを見上げる。

「引き揚げ命令が降りた。これで俺もアーヴみみたいな生意気な奴と会わなくて済む」

「あんだとお？」

アーヴィンはふざけて軽くパンチを繰り出した。

エステルはそれを笑いながら受け止める――

最終話 ティンカーベル

緊急事態のブザーが船内に鳴り響いた。

機関後部から火の手が上がり、炎は瞬く間に燃料庫へと向かって燃え広がる。

「もうこの機体は駄目だ。総員退避！」

「護衛機は何をしている！」

状況把握が困難になり、情報が交錯した。

遂に退艦命令が降り、大型輸送機のレティシアが墮とされた。

離陸直後に惑星^{ルウラ}の奇襲に遭ったのだ。

燃え盛る巨大な炎の塊が、緑のジャングルへと失速して行く――

軍の最後部に就いていたエステル達特殊戦闘機部隊は、惑星^{ルウラ}の思わぬ猛攻に苦戦を強いられていた。

（連邦軍）派兵の当初の目的は、資源争奪の内乱から惑星全土に拡大してしまった戦争の終結であった。が、いつの間にか連邦軍までもが資源争奪戦に参戦し、深入りしてしまったのだ。

調停する立場にあった連邦軍の参戦や、更にはこの惑星^{ルウラ}での「神」的存在である有翅族^{メーヴ}の少女を殺害した事実が発覚し、連邦軍に対する反感は日を追って増すばかりだった。

状況を憂えた地球連邦軍の幹部は撤収する道を選んだ。

連邦軍を敵に廻す事で、内乱を極めていた惑星^{ルウラ}は皮肉にも一つに纏まりつつあったのだ。

エステルは、連邦軍の味方機に「特攻」して来る敵機に恐怖を覚えた。

質よりも膨大な物量を投与して、有翅族^{メーヴ}を冒涇^{ぼつとく}した連邦軍を壊滅させる心算だ。

エステルは手馴^{てだれ}の二機にしっかりとマークされ、何度もロツクオンされていた。A・Iであるシャラのダミー機も、敵機七機を同時に相手していた。

ミサイルの追尾妨害用チャフも底を尽き、機銃の残弾も既に心許無くなっている。

―「後方より熱源接近!」

追尾装置搭載のミサイルだ。

エステルは切り立った深い崖の間に『ティンカーベル』を向かわせた。彼に執拗に付いていた二機は姿を消している。

進路方向上部の崖を機銃で崩し、落石を利用して後方からの熱源を辛うじて回避した。

―「もう一発来ます!」

「了解」

ミサイルがティンカーベルを捉える寸前まで引き付けると、エステルはエンジンを急速にシフトダウンさせて、こちらも鮮やかに攻撃を回避する。

しかし、崖への侵入は『ティンカーベル』の通信を遮断してしまい、シャラが操作していた七機のダミーは一瞬にして撃沈されてしまった。

報告を受けたエステルは焦りの色を滲ませた。

深い崖の間は時折急に狭くなり、水平飛行が出来ない場所も幾つかある。エステルは機体をローリングさせながら巧みにかわして行った。

低気圧が近付いて来ている。

暗雲はたちまち低く垂れ込め、雷雲を呼び、目視確認を困難なものにしていた。

どのくらいの時間が過ぎたのだろうか?

十数機、いや、何十機を墜とした『ティンカーベル』だが、流石に無傷では居られなかった。

極度の緊張はエステル自律神経を徐々に狂わせ始めていた。

―「エステル、心拍数が異常に上がっているわ。大丈夫？」

彼の心拍、呼吸、体温等のヴァイタルチェックが波形になってもニタに映されている。

シヤラの気遣いは嬉しかったが、正直、後から次々と湧いて出る敵機の多さに、もはやお手上げの状態だった。

―「エステル中尉、聞えますか？」

その通信は補給部隊からの連絡だった。

「また随分と遣られたな？」

臨時に補修整備されている、傷付いた『ティンカーベル』を見上げて補給部隊のダグラスがエステルに声を掛けて来た。

エステルは固形食を無理矢理イオン水で流し込むと、立ち上がって軽く頭を下げる。

「ダグラスさん、助かりました」

「まあーだ安心するのは早すぎるぞ？」

ダグラスの言葉にエステルも気を引き締めて顎を引く。

「上のお偉いさん方の団体はそろそろ危険空域を離脱した頃だ。さつき連絡があつた。向こうも大分被害が出ているそうだ。コッチも愚図々しては居られん。取り残されでもすれば大事おおいでだからな」

「ええ」

「エステル」

搭乗支度をする彼を、ダグラスは呼び止めた。

「はい？」

「戻って来いよ」

エステルはその言葉に表情を和らげる。

そして真顔に戻り、黙ってダグラスに敬礼した。

補給を終えた『ティンカーベル』は味方機数機を従えて再び出撃した。

眼前を埋め尽くす敵機の多さに、交戦するエステルは弱音を吐いた。

「なあ、シヤラ」

――「何です？」

「この争いの大元おおもとの火種は、「神」であるお前の奪還だと聞かされたよ」

――「……」

「俺が此処で彼等に投降して、お前を彼等に返せば治まるのかな？」

――「無理だと思います」

「どうして？」

――「貴方が投降したとしても、きっと命の保障はありません」

「俺なんかどうなっても良い。お前が戻りさえすれば……」

――「言わないで！」

シヤラは哀しそうにエステルの言葉を遮った。

――「私が「神」であるかどうかを今、問い質ただしている場合ではありません。それに、もう私は『ティンカーベル』です」

「……そうだったな」

勝手な都合で『ティンカーベル』に生体融合させておいて、今更何を都合の良い事を思い付いているのだろうか。

「シヤラ……すまない」

エステルは無責任な言い様を恥じた。

「シヤラを「神」だと言うのなら、いつそその能力を見せてやる」

エステルは、非公開で行った最終テストを此処でも実行する心算だった。

――「あの時は対象が静止した状態でした。でも、今度は移動しているのでしょうか？一瞬でも計算が遅れれば……」

シヤラはあまり乗り気ではない。

「大丈夫だ。シヤラなら出来るさ」

エステルはそう言ってシヤラのA・Iカメラに微笑んだ。

その笑顔がシャラを勇気付ける。

―「がっ、頑張りますっ！」

「了解。いい返事だ」

―「此方『ティンカーベル』全機、補給機最後部防衛ラインまで後退せよ」

味方機がエステル通信を受けて次々に方向転進をして行った。

湧き上がる暗雲の様な敵機が、一機だけ残った『ティンカーベル』に向かって押し寄せて来る。

「これで燃料の半分が尽きるな」

ほんの少し、不安になった。

エステルは何の躊躇いもなく敵機に向かって加速した――

真正面から打って出た。

『ティンカーベル』に集中砲火が浴びせられる。

美しい銀の機体が銃弾を掠め、削り取られる。エステルは機体を回転させ、銃弾をかわしながらも急速に敵機との距離を縮めた。

敵機と接触する瞬間、『ティンカーベル』の姿が唐突に消えた。

『ティンカーベル』をリーダーからも見失った敵機は混乱し、『ティンカーベル』の能力に畏怖する。

戦意を喪失した編隊が次々に崩れ、退却して行く――

「やった！」

エステルは遠去る敵機の状態をモニタで確認し、小さく拳を握った。

途端に機銃で狙われる。

IFFの警告に、咄嗟に反応して事無きを得た。

―「妖^{あや}しの手をひけらかしても、所詮パイロットはお前だ！」

「何ッ？」

突然、聞き覚えのある通信が割り込んで来た。

正面十一時の方向から急速旋回し、接近して来る機体を確認した。
エステルは素早く操縦桿を倒して回避行動を取った。

「マーベリック！」

「その機体の特殊能力で、一体、幾ら命拾いをした？ 他の奴等は騙せても、お前が口くさな操縦しか出来ないのを俺は知っているんだからな」

マーベリックはエステルを挑発した。

「貴様ああ！」

全身が戦慄した。

二機の戦闘機は互いの背後を取ろうと何度も旋回を繰り返し、執拗に追い掛けた。

「遣るようになったじゃないか！」

自分がエステルよりも遥かに技量が勝っていると思っていたマーベリックは、想像以上に上達していたエステルに、次第に押され気味になって行つた。

『ティンカーベル』を操縦する事で、徐々にエステルの技量が引き上げられていたのだ。

「貴様だけは許さない！」

エステルの正気を逸した怒声が聞える。

激しい銃撃戦になり、『ティンカーベル』が雲を曳いた。

「危険です。この角度で進入すれば……」

「黙っているッ！」

「エステル！ 止めてくださいッ！」

「煩い！」

（今までの俺じゃない！ 絶対……絶対にアイツを撃ち墮してやる！）

必死で止めようとするシャラの警告を無視したエステルは、『ティンカーベル』を垂直旋回させ、機首を真下に向けた。

真下には、『ティンカーベル』に向かってマーベリック機が突き進んで来る。

互いに螺旋を描く様にして急速に接近する――
三十ミリが火を噴いた。

―「エステル！」

シャラの悲鳴が銃声に被る。

「あッ！」

一瞬、何が起こったのか理解出来なかった。右眼の視野が真っ赤に染まった。

エステルは乱暴に酸素マスクを剥ぎ取り、視界を確保する。

コンソールには危険警告のサインが激しく点滅し、コールを繰り返して鳴り止まない。

モニタは、まだマーベリック機を捕捉している。

逆噴射を掛け、主翼のフラップを全開にして、エステルは『ティンカーベル』の機首を強引に百八十度転進させた。

丁度、空中でひらりと前転した状態だ。

強烈な高Gが傷付いたエステルに襲い掛かり、更にダメージを与える。

間髪をいれずに機銃を掃射した。

オレンジ色に光る銃弾が、背後を取られたマーベリック機に容赦無く浴びせられる。

マーベリック機はそのまま真っ直ぐに進路を採ったが、ワントンが遅れて火の手が上がり爆発した。

「や……った……うっ？」

気が抜けた途端、多量の吐血をした。

マーベリック機と擦れ違った時、エステルは機体を貫通した銃弾を体内に浴びていたのだ。

―「エステル？ エステル？」

「……だ、大丈夫だ。問題、無い」

必死に呼び掛けるシャラの心配を打ち払う様に、エステルは激痛

に襲われながらも冷静にそう言った。

暫らくの間、エステルはマーベリック機が墜ちて行ったジャングルを黙って見詰めていた。

マーベリック機は地上に激突すると巨大な火柱を上げて燃え盛り、辺りの樹木を巻き込んだ。真っ黒い煙が渦巻きながら天空に昇って行く。

「帰るよ……シャラ」

―「は、はい」

「皆と随分離れたね……チョツと疲れたな……操縦を任せても良いかい？」

その言い方は普段のエステルに戻っていた。

―「はい」

しかし、そのシャラの声はくぐもった泣き声が混じっていた。

「……」

エステルはシートにぐったりと身体を預け、眼下に広がるジャングルを見詰めて、何かを考え込んでいる様だった。

「シャラ……」

―「はい」

「俺はこの『ティンカーベル』に逢った時から、如何すればお前が分離出来るのかを調べていた。お前の能力が「神」なら、人間の力など及ばないのかも知れない……が」

そこまで言つて、エステルは身体の色が抜けるのを覚えた。

がくりと崩折れたエステルの様子に、シャラが悲鳴を上げる。

「……ま、まだだ。まだいける。は……なしを……」

―「もういいです！ 喋らないで！」

エステルのヴァイタルゲージがどんどん降下して、緊急アラームが鳴った。

「お、前を襲った連中を……摂り込んで成長したよな？ 此処の惑^ルウラ

星の、古文書にも、そんな事が、書き記されて……た」

―「エステル？」

「い……い、か？ よく聴け……お前は、人間の細胞……変化させて、自分の、身体を構成す……出来る」

（駄目だ……意識が……）

そこまで言つて、再び吐血した。

―「お願いですから！ エステル！ 安静にして！」

「……俺の身体を……遣る」

朦朧としながら、エステルは静かに眼を閉じた。既に痛み処が身体感覚さえ失っている。

―「な……何を言っているんです？」

シヤラは動揺して聴き返した。

「た……頼むから、一度で理解、して……くれ……」

エステルは優しくA・Iのカメラに向かって微笑んだ。

「俺を、遣つて分離……しろ」

（『ティンカーベル』から離れて自由になれ）

―「で……出来ません！ エステル！ そんな！」

「ああ、さつき……怒鳴ったり……て……悪かつ……」

―「いいんです！ そんなコト、気になさらないで。お願いですからもう話さないで！」

シヤラは必死でエステルを気遣った。

「い、いか？ ……これ……命れ……い……」

―「そんな……厭です！ 私は『ティンカーベル』で居ます。だから……だから一緒に帰りましょう？」

シヤラは混乱していた。

エステルは力無く嬉しそうに微笑むと、一度大きく息を吐いた。彼の蒼い眼は、もう光さえ認識出来なくなっていた。

「……シヤラ……あ……い……」

微かに唇が動いた。

（愛してる）

エステルは最後までその言葉を告げる事が出来なかった。

「？ エステル？ 如何しました？ エステル？」

遂にヴァイタルゲージが測定不能になった。

エステルの生命数値曲線は真つ直ぐな直線を描き、緊急アラームは一定音を保って途切れなく鳴り続ける。

「……い、厭ああ……返事をして！ エステル！ エステルうう
！」

悲鳴にも似たシャラの泣き叫ぶ声が、低く垂れ込めた暗い雷雲に木霊した。

『帰るよ…… シャラ』

そう言ったエステルの言葉に、シャラは故郷^{ルウラ}ではなく、彼の居た地球を選択していた。

「一体、アレを如何しろって言うんですか？ アレのA・I制御機
能源は「光」なんですよ？ ほんの僅かな光源にも反応出来る。アレ
を黙らせる為には、完全密閉型で暗室可能な格納庫にでも入れてお
かないと、またいつ起動して暴れ出すか……」

「この近くにカントー空軍基地がある。あそこの格納庫ならその条
件を満たせるし、好都合だ。コイツも大人しく眠ってくれるさ」

傷付いた『ティンカーベル』を遠巻きにして、何人ものメカニッ
クが頭を悩まして居た。

『ティンカーベル』はエステル中尉の遺体収容に來た軍を拒み、
修理を拒み、破壊を拒んだ。

そして月日が流れ十年後……

「シャラ？ サシャラ・ナージャ？ 俺だ、覚えているか？」

一人のグレネイチャの男が、立ち入り禁止区域に閉じ込められて
いた彼女の眠りを呼び覚ました――

ティンカーベル（ニデリー

ト4 番外編（） 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4812c/>

ティンカーベル - D - 4 番外編 -

2011年10月22日03時12分発行